

---

# 武器商人と魔女

風緒望

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

武器商人と魔女

### 【Nコード】

N7331A

### 【作者名】

風緒望

### 【あらすじ】

殺人請負人。俗に言う殺し屋。それが不思議な鍵を持つ少年の仕事。物と会話できる義姉の美智留とこなしていた。今日も一人殺し、契約金を授かり帰る途中に一人の少女とであつた事がきっかけで

## ブローグ（前書き）

少しグロテスクな表現があるかも知です。苦手な人は見ないほうがいいかも。

## プロローグ

### プロローグ

正直言って人を殺すのが楽しいかといわれたら、どうだろうと首を傾げてしまう。確かに手のひらに釘を打ち込む瞬間、狂喜に包まれるが、それだけだ。例えばテストで満点近く採ったとき。あのときの喜びは継続され、思い返すたびに嬉しくなるが、殺人は思い返しても罪悪感と、次の人の殺し方しか心に浮かばない。

やっぱりどこか俺は壊れるのだと思う。

それではいつ壊れたか。

考えるまでも無く、ちよつとふざけた力に芽生えた瞬間だろう。

ついでに美香さんという最悪少女に出会ってしまったのも原因の一つか。

そんなことを考えて俺の部屋でくつろいでいると、美智留が言葉を投げてきた。

「仕事」

簡単な一言に俺は恐怖とともに歓喜が湧き上がる。興奮を抑えるように義姉に聞き返した。

「どんな内容だ？」

「依頼人は柊祥子、二十八歳。殺して欲しいのは元彼氏の切坂昇治。できる限り苦しめて殺して、死んだところを写真で撮ってきてほしいとのこと、だと」

「最悪な女だな」

言いながら俺は笑みを抑えることができない。どす黒い感情が湧き上がってきてそれが俺を喜ばしている。

「お前と比べたら聖女だろうよ」

義姉は俺を揶揄するようにそう言った。

「一応は綺麗に生きてるつもりだがな。で、報酬は？」

義姉はあくびをかみ殺しながら答える。

「百万ほどは出せるだとか」

「餓鬼だと思って舐めてるな。やろうと思えば依頼人も殺せるのに

……」

「それはやらない約束」

「分かってるさ。決行は何時？」

「深夜二十五時で。それぐらいには課題片付くと思うから」

「分かった」

俺はそう言っ、今日は徹夜だなと思ってゆっくりと目を閉じた。さあ、祭りの始まりだ。どれだけ狂い、どれだけ壊れるのだろうか。

## プロローグ（後書き）

えっと、初めまして風緒望と申します。

本作品をこれより執筆しますので、読み続けてくれたら幸せです。

書き手側として読まれる事が何よりうれしいことなので。

よろしくおねがいします。

## 第一話「始まり」

### 第一話【始まり】

俺には友達が居ない。故意的に作らないのだ。

人と付き合うとどうしても人間的な感情が生じてしまう。あのクソ義姉は幼くはじめが無いというが、俺が幼いという点だけは同意せざるを得ないと思う。裏と表で完全に感情を変えられる義姉と違い、俺は境目が曖昧でいつもふわふわと漂っている気がする。

まあ、みんなも人殺しと付き合いたくないだろうから、友達関係は正直どうでもいい。

問題はそんな俺でも人が好きになるということだ。

さすが中学生。性欲の塊。女の裸を見るならはらわたを見ているほうが有意義に時を過ごせるとか思っていたのに、どうもこういう感情は勝手に芽生えてしょうがない。

そして不幸にも俺に好かれてしまったその相手は、今日も窓の外を見上げて電波を受信しているようだった。

俺は放課後の喧騒に耳を傾けながら、不思議な少女の後姿を机に突っ伏しながら覗いていた。

「佐名木さん」

ひとりの女子が俺に話しかけてきた。確か名前は田中夕子？だったけ。やたらと昭和の臭いがする名前が印象的。容姿も似た感じで、落ち着いた印象を与えるクラスメイトだ。

「なに」

俺はできる限り無愛想に答える。腕が口をふさいでいるから、しくぐもった声になってしまう。

「ええっと、確か佐名木さんのお姉さんって、美智留さんだよな？」  
緊張しているのか、その顔は真っ赤に染まり、腕をもじもじとさせている。

「そうだけど？」

義姉の名前が出てきて俺は顔を上げた。返事もまるで続きを求めように語尾を上げてしまう。やはり、どうも幼いなと自覚する。

「それで、お兄ちゃんから、あ、お兄ちゃんというのは美智留さんとクラスメイトで三年生なんだけどね、手紙を預かってるの」

俺は彼女が言いたいことが分かった気がする。つまりはあの義姉に俺から手紙を届けろと言いたいのだろう。

「あの、お願いできますか？」

彼女もそれを察したようで、省略して尋ねてきた。さて、どうしたものか、俺から渡しても、というか誰から渡してもあの義姉は確実に中身も読まずに破り捨てるだろう。そうなったら俺が逆恨みされそう。ここは正しそうなことを言っではぐらかすほうがいいかもしれない。

「別に変わりに渡してもいいけど、やっぱり本人から直接渡したほうが気持ちは通じるんじゃないか？渡した瞬間の相手の」

そこまで言っただけ訝そうにこちらを見てくる夕子さんの顔を見て、俺のとてもない勘違いだったと悟る。そういえば、今日あいつ休んでいるんだ。いくらあいつがモテるからといってもほかの可能性も考えられたのに、自分の馬鹿さ加減に泣きたくなる。

慌てたように尻拭いの言葉を探す俺の顔を見て、彼女はどんな勘違いをしたのかわかったらしく、少し笑った。

「あ、す、すいません」

そしてすぐに謝る。俺の機嫌を損ねたとも思っただろう。気遣いのできる優しい子なんだなと思って、自分の思考の年寄り臭さにこちらも笑ってしまう。

「ふふふ」

そう彼女は言葉を漏らして笑った。馬鹿笑いかじゃなく、本当に上品な笑い。

「それで、手紙お願いできますか？」

「ああ、分かった」



頬が緩むのを感じながら、クリアファイルに入った手紙を受け取った。

夕子さんは軽く頭を下げて近くに居た友達たちと合流し、帰る準備を始めた。グループの一人が俺を指差し、何かを言っている。ひそひそ声で、言葉は聞こえないが、何を言っているのかは簡単に分かる。

『どうしてあんな奴と会話できるの？無愛想で気持ち悪いじゃないだろう。唇の動きと先ほどの夕子さんとの会話の後ということから推測可能だ。そして夕子さんはそれを否定するだろう。あの人の性格と、先ほど見せてしまった俺の態度から、推測できてしまい、気が滅入る。ちよつと気が緩みすぎた。』

「無愛想は無愛想だけど、優しいよ？」

しかし彼女は否定とも肯定もつかぬ返事を、堂々と言ったのだ。周りに居る女子は不思議そうに彼女を覗き込んだが、ゆーちゃんは優しいしね、と言って帰っていった。帰り際、夕子さんはこちらに振り返り、軽く手を振って小走りでグループの元に追いついていく。やはり彼女も不思議な性格の所持者らしい。

俺はそう思っただけ以上に不思議な性格の所持者の窓際に座る彼女の観察と続けようと机に突っ伏し彼女のほうを覗き見た。腕の中で彼女はこちら側を凝視しており、すぐに窓の外に視線を向けた。やはり彼女の思考を読み取ることは俺には不可能だと思う。

ヒグラシの鳴き始める初夏。ヒグラシの居る田舎。ヒグラシの名の由来どおり日が暮れ始めていた。俺はあぜ道を踏みしめ帰路に着きながらどうも落ち着かない気持ちに駆られる。

何でかっというときこつちを彼女が見ていたことでしかなく、あの時はどうも思わなかったが、彼女が窓の外を見ないことはほと

んど無かったはずだ。教室に目を向けたのは先生に名前を言われた時ぐらい。いつもはずっと外を見て、まるで電波でも読み取るように外を見続けている。

なら何故だろう。

可能性として考えられるのは三つ。

一、なんとなく。

二、夕子さんを見ていた。

三、俺を見ていた。

……………三を選択したい。

けど現実問題として考えるとやはり一が一番あるような気がする。夕子さんとも彼女は話していないし、そもそも彼女には俺よりクラスの奴らと関わることを嫌がってるようなきらいがある。

結局何も分からないということで落ち着き、自分の頭の中はやっぱり小玉スイカほどにスカスカなのだと再認識しただけだった。

家に帰ると義姉の美智留がソファに横になり沈んでいた。昨夜決行だったはずの依頼を彼女がこじらした季節はずれの風邪のせいで断念して休ませていたのだが、いまだに良くならないらしい。

「……………おかえり」

水をイメージしたような、静かな声が聞こえる。

「ああ」

俺は無愛想に答える。けど、おかえり、にああ、と答えるのは日本語として機能していない気がする。なので言い直した。

「ただいま、美智留」

「おかえり、義弟」

美智留は俺の罪を毎回えぐるように義弟と俺を呼ぶ。仲が悪いわけじゃない、それどころか確実にいいだろう。まあ、実の親を殺したのだし仕方がない。昔、望んだものを手に入れようと無茶をした

結果がこれだ。

「それで体調の方は？」

俺は美智留の前に立ち顔色を確かめながら言った。かすかに頬に朱がさし、熱っぽさが伺える。背中まで届く長い黒髪の毛が汗で顔に張り付いていた。

「少ししんどい。寝れば直る」

簡素な言葉は美智留語で心配するなという意味だ。目を瞑り、すぐに寝息を立て始めた。

「寝るなら布団のうえで寝ろよ。革は汗吸い取らないから……」  
「もう遅いか」

俺は少しだけ頭を掻き、やはり姉の部屋に連れて行くべきなのかと考慮し、連れて行けばからかわれ、連れて行かねば風邪は悪化、という結論に達した。

そろそろ美香さん特性三節根がとてつもなく欲しい。確か五百万ほどと笑顔で鬼のような値段を押し付けてきていた。俺の預金五百万に今回、美智留と取り分を分けたとしても、低く見積もって四十万。生活費には最低限百万は取つときたいから、よし、今回の依頼はさつさと成し遂げたい。

からかわれてもいいから、美智留を部屋に連れて行くべきだと考えた。腕をそつと彼女の腰と背中にし、気づく。

服が汗で濡れている。

いやダメだ。思春期真っ盛りだからといっても義理とはいえ姉の着替えを手伝おうだなんて。というか風邪で、しかも寝ている姉の服を脱がすというのはほとんどあれだ。適当な語句が混乱した脳の中から見つからないがとにかくあれなんだ。

よし、とにかく冷静になろう。

そつと回した腕を離し、胸に手を当てて、目を閉じて深呼吸。幾分か冷静さを取り戻したところで目を開けたら、目を開けた美智留がこちらを見ていた。

「さすが中学生、エロイ」

しんどそうにどこか曇っているのにその顔はにやけている。

「お前も中学生だろうが」

俺は内心の動揺を我が全精力をもって制しながら言葉を返す。

「ああ、そうか。なら、男はエロイな」

「ていうか、勘違いしてるけど俺はお前の服が濡れているから着替えさせようとしたわけで」

「つまりは私の裸を見ようとしたわけだろ？」

「どうしてそこに結論がいく」

完全に外れと言うわけでもないが。

「俺は純粹に美智留の心配をしただけだ」

やましいことは何一つ無い。と思う。というか信じたい。

「まあ、あれだ。着替えるといわれたらさすがに風邪をこじらせようとも自力でやるから」

美智留は目をそらしてソファからおり、頼りない足取りで階段へと歩いていく。どうやら俺の勝ちらしい。なんの勝負かどうかは知らないけど。

「もし心配してるなら濡れタオル作って来い。後、氷水」

それだけの命令を残し彼女は階上へと昇っていった。俺は準備をするために洗面所へと足を向けた。

「それで、仕事の内容だけだ」

完全とは言わないが、熱が下がりセキが少し出る程度に収まった美智留のことを考え、中華粥を炊いた圧力鍋を俺はテーブルに運んでいた。

「残酷な殺し方って、どうするの？」

どん、と重い音が聞こえて、中華粥をそれぞれの皿に盛った。薬味やらだしをとった鶏肉を割いたのやらが並び、手抜きとしか言いようが無い食卓だ。

俺は美智留に中華粥を盛った皿を渡しながら、答えた。

「そうだな。普通に 苦しめて だけなんだろう？ なら手の平に釘打ち込んで、熱した針金爪の間に突っ込んで、それから爪を引き剥がした後、骨を砕いて、腹搔っ捌いて内臓をぐちゃぐちゃにするとか」  
「食事中にする話じゃないよな、と片隅に思いながら、鶏肉を頼張る。内臓を引きずり出すのは、写真を撮ってきて欲しいといわれた依頼人の意思を汲み取ったことだ。爪を引き剥がしたり、指の骨を砕いたりするのは、拷問にもよく用いられ確かな苦痛を与えられるが、あまりに地味だ。」

写真を撮ってきて欲しいということは、殺したかどうかの確認と、あと、自分を傷つけた相手がどんな状態になったかを知りたいのだろう。

なら、それには全力を持って応えるべきだ。一仕事人として。

「ああ、飯がまずくなる」

自分で聞いたというその態度は無いだろうと思うが、さすがに精密に言い過ぎた気もする。

「すまん」

だから正直に謝るが、美智留はハツとしたように表情を変えた。

「あ、別にいい。なれてない私も悪いのだし」

一女子が、内臓を見るのになれるのはどうかと思うから別にいいと思うが。

「それで、私はみんなに何を頼めばいいの？」

一瞬何か分からなかったが、彼女の 能力 のことなんだとすぐに気づく。

「そうだな、切坂昇治のすべてを否定するように頼んでくれたら嬉しいな」

「分かった」

彼女は真面目な顔をしてうなずいた。長い髪が揺れ、しゃんと音楽を奏でる。凜とすました彼女は、完全に裏の顔に変わっていた。  
「それじゃ、食事を終え次第、行こうか」

微笑すらなく、不安すらなく、一抹の感情すらなく。彼女の抑揚の無いあまりに平坦な声は、俺には少し怖く感じる。

「ああ。作りすぎたから、口内まで逆流するまで食ってくれたら嬉しいが」

二人しかいないのに四合も炊いてしまった圧力鍋を見て俺はわざとらしく困り顔を作った。自分が感情を作らないと、美智留の無感情に食われそうだった。

俺が住む場所は田舎だが、山の裏はニュータウンが広がっている。ホテルが建ち、小綺麗な住宅街が広がり有名なパティシエが立てた喫茶店があり。俺の街は紙一重（いや山一重？）でだいぶ賑やかさが違う。そんな片隅にあるマンションに俺らは居た。

「1002号室か」

義姉はメモを見ながら階段を上る。エレベーターを使わないのは、ただ何となくだろう。裏の彼女はひどく気まぐれで、感情が薄い。

階段を昇り、踊り場にたどり着くたびに下界に広がる高さが高くなってきた、落としたら死ぬだろうな、と目の前の義姉に似たあれを殺そうと一瞬思い、諦める。

空気をお願いしたら彼女は空を飛ぶことすら可能なのだ。殺すことなど不可能に違いない。

そんなことを考えている間に目的地、つまりは切坂昇治という哀れな被害者の家に着いたというわけだ。

彼女はチャイムも鳴らさず取っ手をガチャガチャ言わす。

「施錠しているみたい」

そりゃそうだろう、マンションとは言え用心するに越したことが無いのだから。

「お願いすればいいんじゃないか？」

「そうね」

俺たちはチャイムを鳴らすという行為を選択肢に入れず、不法侵入の道しか選ばない。

「扉さん扉さん。あなた様の中の者に少々時間をいただきたいと存じまして、鍵を空けてもらいたいのです」

子供のような言葉を並べ、扉を人差し指で軽くたたくと、カチャ、と軽い音が聞こえて開錠したことを教えてくれた。

「さて、殺しに参ろうか参ろうか。鮮血が蝶のように舞い踊り肉片が芋虫のように這い回る。なんと楽しいことでしょう」

彼女は楽しそうに口ずさみ、扉を勢いよく開けて家内に進入した。俺はその後ろに従う。義姉は義姉で、もう確実に美智留ではなくなっていた。彼女は多重人格といったほうが良いかもしれない。それほど性格の変貌。

あくまで無表情に、あくまで殺人を愉しみ。

あるいは彼女は弱かったのかもしれない。だからといって誰がそれを責められるだろうか。

俺はそんな無駄な思考に酔いながら土足でフローリングの廊下をすたすたと歩いていた。

「それじゃ、義弟、私は壁さんをお願いしとくから。本人見ついたら貼り付けにしといて」

「了解した。特に声は絶対に漏れないようにお願いしてくれ」

「分かってる」

「そうか、なら良い」

俺はそう言つて標的を探すことにする。もしかしたら俺たちの進入に気づいてどこかで金属バッドを握っているかもしれないし、どこかに隠れているかもしれない。

「面倒だよな……」

俺はそれだけ呟いて、ジープンのポケットから鍵束を出す。リングに凹凸が無い、不思議な鍵がガチャガチャと大量に付いている。

俺は適当に一つ手にとって思いつき引き張る。それだけで鍵がはずれリングは輪を保っている。

鍵には武器庫、という文字が黒色で浮き上がった。

「さて、とりあえず釘と小槌だけでも取り出しとくか……」

俺は目の前の何も無い空間を指でつつく。

瞬間、そこに小さな光の穴が出来て、俺はそこに吸い込まれるように鍵を差し込む。

ガチャ

重い鍵が外れる音が響き、俺は空間が開いたのだと感じた。鍵をそのままに目の前の空間に手をさしこむ。

引き抜いたときには一本の小槌と四本の釘。左手を握り指の間に釘を挟み、右手に小槌を握り搜索を再開する。

彼は風呂に入っていたようだ。どうやら俺たちの進入にも気づいていないらしい。

風呂場で殺してもいいが、やはり釘を使うとなると打ちやすい、木製のテーブルが置いてあるリビングが良い。

少し待つとしよう。そう思って俺はイスに腰掛けた。

しかし暇だな。俺は小槌を机の上において、再びポケットに手を突っ込み鍵束を出す。鍵を適当に一本選んで引きちぎり、浮かんでくる文字も確認せずに目の前の小さな光の穴に差し込む。

「確か、今朝お茶を入れといたはずだから……」

言いながら手を突っ込み、ペットボトルを見つけて引っ張り出す。キャップをあけ、喉を湿らせ後ろに放り投げる。

しかし、地面に当たる音は聞こえない。

俺がこの奇妙な鍵束を手に入れたのはいつだったか分からない。

分かっているのは絶対的にこの鍵束は、まるで俺を呪い続けるようにポケットに入っていて、捨てても入っていることだけ。

美香さんは魔法だと、そう戯言をほざいていた。

もしかしたらそれは射ているのかもしれない。義姉の 対話はどう見ても魔法だ。俺の力もそうかもしれない。

しかしそんなことは些細なことで、力があるならそれを使用し、最も向いたことに使えばいいだけだ。



それだけだ。

力チャ

扉が開く音が聞こえる。シャワーの音が途切れている。

俺は思考を切り、小槌を片手に持つてイスに深く座りなおした。義姉の対話が済んでいないみたいなので、今から殺し始めたら隣人に気づかれてしまう。それまで楽しいお喋りでもしよう。

「切坂昇治さんですね」

俺は会話を始める。相手は下着だけの格好でタオルで頭の水気を取りながら出て来た。がっしりとした筋肉質。背はさすが大人とあって俺より高い。顔は堀が深く、格好が良いといえるだろう。その顔は驚きに染まっている。

「叫ばないで下さいよ。そちらが何もしなければ私は何もしませんから」

嘘だが。

「何者だ……？」

訝しげな声音で、怪訝そうな顔つきでそう、切坂昇治は訊ねてきた。

「柊祥子さんのお使いですよ」

あくまでにこやかに、俺は対処する。

「貴方に振られたのが少々傷付いたらしく、貴方の様子を見てきてくださいと頼まれたのです。いわゆる尾行ですね」

「探偵か……？」

お前がそう望むなら俺は道化を演じよう。

「おっと、口が滑ってしまいました。お手伝いという形ですけど、恐れ多くも探偵です。まっ、私は見たとおり、まだまだ幼く父上には遠く及びませんが」

馬鹿丁寧な口調。聞くほうもイライラするかもしれないが、喋る本人が一番苛立つ。

「どうやって家に入った？」

俺の容姿と言動に少し警戒を緩めたようだ。馬鹿が過ぎる。

「玄関からお邪魔しました。少々無用心ですよ、お風呂に入るときぐらいは鍵をかけないと」

「鍵は閉めたはずだが……」

「そうでしたっけ？ 私には過去を知ることなんて出来ないですからよく分かりません」

肩をすくめて俺は道化を演じ続ける。過去など俺の鍵をもつてすればいくらかでも閲覧できるが。

「それで、何のようだ？」

俺の言葉をさほど気にしないところを見ると先ほどの言葉は独り言だったらしい。

「両手に持つもので分かってくれませんか？」

俺は釘と小槌を見えやすいように持ち上げて示す。

「少々貴方の行動が過ぎたようなので、柊様からお仕置きを頼まれているのです」

俺はゆっくり立つ。義姉の対話はそろそろ終わりを迎えるはずだ。  
「それほど危険なことをやろうとしているわけではありませんからご安心を」

ふふふふふ、と俺はわざとらしい笑い声を上げながら一步一步確かめるようにゆっくりと彼に近づく。切坂昇治は脅えたようにその場に固まり、俺は少々興ざめしながらも歩を近づけていく。

「ああそうそう、もう動かないほうが良いですよ。この家はもう貴方を認めず拒絶を示しています。お前の一挙一動はすべて否定され、それは物理法則にも反する　！」

例えば俺が今踏み出した一步。地面を踏んだときに加わった力は地面に吸収される。

しかし、義姉の対話で拒絶を示されたのなら。

彼の一步の力は地面に吸収されずに、すべて反射され、俺たちの数倍の負荷を与えてくれる。

思うように動けず、体力だけが奪われていく恐怖。

純粹に拷問をするときや、誰かを追いかけるときには良くこの対

話を使う。

利便性に優れる対話の力の片鱗だ。

「さて、次は俺の仕事の始まりだ。まずは釘を打ち込ませてもらいますよ……！」

地面を蹴飛ばし彼に近づく。彼の腕を引っ張り、反射的に体勢整えようと後ろに力をかけたのに乗じて俺は身体をぶつけ切坂昇治の身体を押し倒す。

「ぐおお」

彼のうめき声を聞きながらも俺はすぐに彼の上に座り、まずは左足、ふくらはぎに釘を置いて、小槌を思いつき振り上げ叩く。

筋を絶つ音。骨が砕ける音。筋を絶つ感触。骨が砕ける感触。

俺は戦慄し猛烈な吐き気に襲われながら、それ以上の狂喜に包まれていく。

もう一回叩き込む。野太い悲鳴。地面に貫通する感触。

俺は次の一本を右足のふくらはぎに当てて、小槌を振り落とす。

野太い悲鳴を後ろに聞きながら、俺は狂喜と共に振り下ろす。

ああ、俺が壊れていく。壊れて壊れて壊れていく。千切られ粉碎され粉々にされ、挽肉の様になってこねられて別に形を形成されていく感触。

ああああ。なんて素晴らしい。

俺はキリサカシヨウジの右手の甲に釘を合わせ、さらに打ち降ろす。打ち下ろしうちおろしウチオロシ。

地面に貫通したら左手に合わせて作業を続ける。

肉が千切れる感触。骨が粉碎される感触。小槌が釘の尻をたたく感触。釘がフローリングに刺さる感触。

ああ、俺は、俺は、俺は、

どこまで堕ちられるのだろう。

「義弟」

狂わしいほどの歓楽の渦に吸い込まれていた俺に平坦な声が届いた。

「少し落ち着け」

後ろを振り向くと無表情の美智留、いや義姉が椅子に座っていた。  
「さっきのお前は怖すぎる」

俺は言葉を返さず、ただ深呼吸をする。左手に握られていた四本の釘はすでに無い。目の前に貼り付けにされている男の手足に打ち付けてあるから。

少し落ち着いた俺は鍵束を取り出して、適当に一本引きちぎる。浮かび上がる文字は雑貨庫。それを視認した上で、目の前の空間に鍵穴を創造し、空間を開錠させ手をつ込み針金とジッポを取り出す。

「それじゃあ、始めるから」

俺は自分に言い聞かすように告げて、針金をジッポの炎で炙る。  
今からちよつとした苦痛を与えよう。

本当にちよつとだけだから。爪の中に熱した針金を差し込むだけだから。

俺は恐怖と苦痛に染まる男の顔に心の中でそう告げて。

歓喜か恐怖か良く分からないけど少しだけ震える指に力をこめて悲痛な、許しを請う叫び声を聞きながら、俺は、作業を開始した。肉に針金が刺さるおぞましい感触。野太い、ウルサイ叫び声。わずかに指を動かし、クチュクチュと異音が部屋に広がる。

やばい。吐きそうだ。猛烈に。自己嫌悪。だけどそれ以上に楽しい。嬉しい。

俺の一挙一動でキリサカシヨウジは叫び叫び叫ぶ。

俺はどこまで壊れるのだろう。

どこまで堕ちるのだろう。

いつも思う、些細なこと。

指を動かし悲鳴を響かせ、陶醉した表情を浮かべる義姉に吐き気をもよおし、俺は作業を続ける。

両手のすべての爪に針金を差し込んだあと、俺はゆっくりと爪をはがしていく。そのたびに叫ぶキリサカシヨウジが哀れで、哀れで、

だからこそ面白い。

俺は空間からペンチを取り出して、思い直してしまい、小槌を振るって右手の小指から砕いていく。次は左手、次は足。

それが終わって、俺は額に流れる汗を拭いた。

「疲れた？」

「少しな」

俺は義姉の問いに短く答える。それから空間から美香さんから始めていただいた武器、黒塗りの暗殺用の短刀を取り出す。

「さて、終わりだ」

腹にナイフを沿え、一気に引く。ツーツと赤い線が走り、内部を晒す。

俺は躊躇いもなく手を入れた。男の悲鳴は続く。

「苦しんで苦しんで幸せに死ね」

俺は最期の言葉を送ってやり、手を動かす。同時に大量の出血。

おそらくキリサカシヨウジには激痛が走っているだろう。

しばらくして、悲鳴は途絶えた。

ふう、俺は小さくため息をつく。

傍らでは義姉が持参したデジカメで切坂昇治の写真を撮っていた。確かそういう依頼だっけ。

思い出しながらも依頼人に写真を渡すときのことを考えて憂鬱になる。

だって、こんな死体を見たら確実に俺を人殺し！とでも言うのだから。

依頼した時点でめえも共犯だということを、責任をすべて俺らに押し付けて叫ぶのだから。

まあ、そうなったら、そいつの人生を崩せばいいだけだ。

「なかなかむごいな」

義姉は言いながら彼の腹部に手突っ込んでいた。

「やめれ」

「何故だ？人体の腹に素手をつ突っ込むことなど生涯で一度出来るかどうかだぞ？」

普通はそういう体験が出来るチャンスがあるうと、やろうと思わないだろうがな。

興奮して内臓を引っ張り出している義姉を見て俺はため息をついた。

グロイよ。

美香さんの家は簡素な家だ。

というか木製だ。しかも場所は廃墟ビルの屋上。風が気持ち良いからそこらの廃材で建てたらしい。もう何がしたいのか良く分からない。

俺らは切坂を殺した足でここに向かっていた。表の性格に戻った美智留は、先ほど行った行為がよほどショックだったらしく、今は気を失って俺の背中で寝息を立てている。

「お邪魔します」

俺は一礼して扉を開けて中に入った。中は二十畳ぐらいのワンルームの小さな家だ。窓など暗幕で覆われており（というか覆うなら最初から作るなよ）光は蝋燭の炎だけ。本棚には黒い背表紙の本ばかり。どう見ても狂ったオカルトマニアの部屋にしか見えない。

その奥に座る少女はキーボードをひたすら叩いてパソコンに走る文字に目を走らしている。ポニーテールに結ばれているのは今日の気分だろう。

その少女が俺らに、性格には扉を開けたときの光に気づいたように顔を上げて振り向いた。

「おお、佐名木義姉弟ではないか」

偉そうな、しかし幼い声。

「姉弟って言われたら同音の師弟を思い浮かべてしまって軽く鬱に

なるから止めると何度言えば」

「戯言など言わずとも良い」

俺はたまにこの小学生を殺したくなる。なにせ二つ年下なのだ。

「なにのような。私は忙しい」

ちやつちやつと帰れと言外に言われている気もしないでもないが、俺は目的を果たす。

「買い物だ」

そう言うとき美香さんは目を光らす。そんなに金をためて何がしたいんだろう。

「ほう、何が欲しい？」

「こっち側の最新情報」

俺みたいな殺人請負人は多くないといえ、確かに人が居る。

「なんだ、そんなことか」彼女はつまらなさそうに頭を振る。「一万程度で良いだろう」

そう言うとき手を伸ばす。今すぐ払え。そう言っているらしい。

「しかし、新聞で手に入るあちらの情報とえらい違いだよ……」

俺は嘆息しながら空間を開錠させ、ピン札を手渡す。

「ほんとに便利な能力だな」

美香さんは羨ましそうに言った。

「まあな。何でも入るし持ち運び自由だからな」

「うん？ いや、そう意味じゃないが、まあ良いか」

美香さんは否定して、しかし答えを教えてくれない。彼女はくりりと回転イスを回しモニターを覗く。

「最新情報か」彼女はキーを叩く。「最近衝撃的だったのが、平山の死亡ぐらいか？」

「誰そいつ？」

「ああ、お前らとは格が違うからあまり意味ないかもな」

「俺らが下だというのかよ」

不機嫌な俺の声に彼女は肩越しに振り向いてきた。

「まさか、お前みたいな化け物に勝てる常人が居るともしかして思

っているのか？」

俺は美香さんの見下したような視線にどう返せばいいか困る。

「自覚していないのなら教えてやる。お前は化け物だ。いや、怪物か。どちらとも同じだな。さして違いは無い。猟奇殺人犯や愉快殺人犯。お前はそのどちらにも当てはまりどちらにも当てはまらない。不可思議な力を行使し死体すら殺そうとする。これが普通と思っていたのか？」

彼女は俺の目を見てさらに続ける。

「思っていたのだな。貴様に普通ということは許されず平凡に暮す義務も権利も無い。勘違いしているようだ。貴様はすでに人から外れている。人外の化け物だ。それを忘れるな」

そしてつまらなさそうに視線をはずした。

俺は美香さんをさん付けで呼ぶのは彼女がこうだからだ。どこか達観しきりどこか悟りきっているような雰囲気。まるで絶望の果てを覗いたような。

「ああ、そうそう。金を貰っておきながら何も伝えないのは私の自尊心が許さないから教えとくよ」

彼女はパソコンに向かいながら言葉を伝えてきた。

「お前みたいな人外の化け物は世界中に居る。私も含めてね」

衝撃的、といえば衝撃的だったのかもしれない。だけど、安堵感も何故だかあった。

多分、仲間が居て安心できたのだろう。

誰かに責任を押し付けようとするこの性格に俺は嫌悪する。

「美香さんものか……？」

「当たり前。お前の武器を作っているのは誰？こんな弱い小学生があんな凶器を作れると思っているの？」

振り返りもせずにそう言った。

「それと、少しだけ占ってあげようか」そして声音を変えて言い始める。「お前の学校にも人外の化け物が居るわよ。性格が最悪なのも居るし、和解出来そうなのも居る。少しは気を配りなさいよ」



俺は挨拶もしないで踵を返し入り口に向かう。

「そうそう。また依頼が入ったら美智留に知らせるから」

「そりゃどうも」

俺はそう言って生暖かい夜風が吹く外に出た。

「ん……」

後ろで小さな声が聞こえた。

「美智留？起きたのか？」

「ああ、義弟……。この状況を六文字で説明しろ」

「おんぶしてる」

「死ね」

寝起きから早々俺の首を絞めてくる。俺は美智留の足を支えていた手を離して俺の首に絡み付いている腕に抵抗を示してみるのが、綺麗に決まっているその腕はなかなか離れなかった。というか死ぬ。

「寝込みを襲うなと何度言ったら」

「襲つ、てね、えし」

必死の抗弁もむなしくさらにきりきりと締め上げられていく。本格的に苦しくなってきたので腰を回し、肘を美智留のわき腹にぶつける。

「ふぐつ」

小さな呻き声と共に腕が緩み、その隙に俺は全力を持って腕を離す。新鮮な空気が肺に入ってきて、俺は生を実感する。ああ、生きているって素晴らしい。

振り向いたら美智留は、わき腹を抑えながら敵意に満ちた涙目でこちらを睨んでいたが、やがて諦めたようにビルの端に歩を進める。

「おい」俺が声をかけると彼女は振り返った。「どこに行くんだ？」

「依頼人のところ。お金を貰わないと」

そしてちよいちよいと手を振る。俺はゆっくりと美智留に近づいていく。と、唐突に彼女に腕をつかまれた。

「仕返し」

彼女は悪戯っぽく微笑んで。俺は最悪な展開を目前の下界を見て

想像してしまい。

「ちよ、ちよつと、俺普通の人間、落ちたら確実に死す！」

俺の言葉など完全に無視してグルンと彼女は回り、彼女に腕をつかまれた俺は遠心力が加算されたままぶっ飛び、落下防止のひし形の金網フェンスにぶつかり、ボルトが外れるのを視界の端で確認し、一瞬の浮遊感。そして轟音と共に感じる風の暴力。

「うわあああああああああああああ！！！！！！！！！！」

俺の叫び声は風邪に揉み消された。空に見える小さな星たちが俺を嘲笑っているように見え、月でさえ哄笑しているように見えた。

どこか詩人に成りきって、生涯の幕を閉じようとした俺の後ろに小さな足音が聞こえた。

俺は振り返ることも出来ないが、フェンスと共に落ちる俺に追いつけるのは美智留ぐらいしか居ないだろう。

彼女の澄んだ声が聞こえた。それはまるで呪文のような丁寧でいて乱暴な言葉。聞き取れないけど、それだけは分かった。

そして、フェンスが落下をとめた。

電柱より低い位置。ふわふわと浮かぶ金網フェンス。ここが廃墟でなく、人が往来していたらどうなっていたのだろう。

「面白かった？」

「死ぬ。本当に死ぬ。つーか死ぬ」

楽しそうな美智留の言葉に俺は呪いを吐きぐったりとフェンスにもたれ込んだ。しばらく高所恐怖症になりそうだ。

「それじゃ、行きましようか」

どこか楽しげに美智留は倒れこむ俺の肩に片腕を回しながら、もう片方の腕で空を指差す。

「空さん、空さん。先ほど交わした会話通りに私たちを目的地へと誘ってください」

ふわり、と少しだけフェンスは傾き、そして飛び立つ。魔法の絨毯ならぬ魔法の金網フェンスか。ちっともロマンチックじゃねえ。

俺はため息をつきながら、何故美智留がこうも上機嫌なのか少し

だけ疑問に思った。

依頼人の家は俺らの家の近くだった。といっても徒歩二十分はかかるけど。山向こう、つまりは賑わっている向こう側へ行くよりはだいぶん近い。まあ、空を飛ばさずにだけだ。

田んぼに囲まれた、真新しい住宅。俺らはチャイムを鳴らさずノックする。チャイムは会話を録音される可能性を孕んでいるからだ。もちろん、周囲に人がいないかどうかのチェックは欠かせない。

依頼人は、柊祥子らしき涼しそうなワンピースを纏う細身の女性は意外にすばやく扉を開けてくれた。俺たちの顔を見て怪訝な視線を送ってきたが美智留が「美香さんをご存知ですよ？」と言うと分かったらしく顔をわずかに青くしてどうぞと俺たちを中に迎えた。「あの……」

柊さんは俺たちに涼しそうな麦茶を注いだグラスを置いて、しばらくしてそう口火を切る。

「あの、依頼した件ですよ？」

その視線は落ち着きなど無く、常に泳ぎ回る。

「ええ」俺は上面だけの笑顔で応える。

「その、あのことは無かったことにしてもらえないでしょうか」

彼女は俺の短い返事を聞いて声をわずかに荒げて慌てるように言った。

なんという無責任。なんという偽善。

「無かったことと言われましても」

俺は鍵を取り出し空間を開錠させ手を入れた。彼女は目を見開き俺の挙動を目で追っている。俺は一枚の写真を取り出す。先ほどのあれだ。切坂の家にプリンターがあったのでプリントアウトしてきた。データが残るといやだから、という理由でパソコンとプリンターを滅多打ちにしてきたから捜査の混乱にもなるかもしれない。

「もう、済んじゃっていますし」

苦笑と共に彼女に写真を投げつけた。彼女は反射のように写真を受け取り、そして見た。

「ひ、ひゃ、いやあああああああ」

叫んで写真を投げ出し、嘔吐する。俺は薄っぺらな笑顔を浮かべてその様子を眺め、美智留は顔を少し青くして彼女が胃液を吐き出している姿から目をそらしていた。

「いや、いや、いや」

彼女は首を振りながら、涙を撒き散らしながら放心したように言い続ける。

「私はこんなことを望んでいない。私は望んでいない。私は」

「なら何故美香さんに依頼したのです？」

俺は混乱している彼女に言葉を投げかけた。涙べちょべちょの顔を上げずに彼女は言葉を連ねる。

「だって……」

ああ、こいつは単純な三段論法で簡単に崩れるタイプだ。

「だって何です？」

「だって、あの人が私を振ったから……」

彼女の言葉はおそらくもう俺には向けられていない。俺の問いかけは彼女の問い。自分で自分を壊していく。

「だけど？」

「だけど、少し思い直したんです。私にも負があったって。殺すほどじゃないって」

「つまりどういうことですか？」

「つまり、つまり……」

はい終了。子供を叱る時と同じで自分がなぜ悪いかに導く。導き方は問題提起、否定、結論。この三つを順にやることでいやいやながらも認めざるを得ない状況を作る。認めた時点でそれはすべてが罪になり、業を担い始める一瞬だ。誰かが押し付けた事柄なら精一杯否定できるが、自分で認めた時点でそれも出来ない。

それをすることは自分への裏切り。背徳的な行為。

「私たちは別にお説教に参ったわけではないんですけど」

隣で美智留が言った。顔はいまだに少し青い。長い髪の毛が少し病人を思わせる。しかし彼女は仕事と割り切り始めているみたいだ。笑顔を作る。

「私たちは契約金を貰いに来たんです。それでこのことは終わりにしましょう。貴方の反省や後悔は後に回してください。私たちの予定を崩してやるほど重要なことでもないでしょうし。悔恨の情ほど迷惑なものはありませんから」

彼女の言葉は冷たい。故に優しい。

「現金で百万以上、という契約内容です」

そして綺麗に微笑む。その笑顔は妖艶で危なっかしさが付属されている。確実に仕事用の上面。だからこそ怖い。

矛盾したおかしいな感覚を抱かせる。美智留の独特の喋り方。独特の表情の作成。

「お渡ししていただけませんかね？」

につこり微笑んで首を斜めに傾げる。その姿は安らぎと恐怖、同時に押し付ける。

柊祥子は脅えたように魅入られたようにその笑顔を見て固まる。

ああゝあ。精神攻撃二連発。人生狂わせてしまったかも。いや、これも必然と考えるか。

俺はくそつたれたことを考えて、これから起こりうる事態が分かりわずかに憂鬱になる。

「貴方が依頼して私たちはそれを成し遂げました」美智留は言う。

「つまりそれを実行するために結んだ契約を遵守してもらおうとしているのです。どこか不思議なところでも？」

「でも、でも……！」

彼女は涙を流し混乱した様子でひたすら でも と連呼する。

「何がでもなのですか？ 子供ではないんですから聞き分けてくださいよ。貴方が依頼した。私たちが成し遂げた。それに見合う報酬

を頂く。今最終段階なのです。私たちも早く切り上げたいんです。ですから早く渡してください」

につこり笑顔で、彼女は同じ意味の言葉を言い続ける。追い詰めていく。

「それとも貴方はもしかして払わないつもりなのでしょうか？ それなら私たちもそれなりの処置を下させていただきますよ。殺しが本業ですしね……。いざとなれば死よりも苦痛を与えてあげますよ」脅し始めた。ちなみに死ぬよりつらいことというのは、肉体的苦痛ではなく、俺の力で心が無理やりこじ開けたり、過去を覗いたりそういうこと。この鍵束は心の傷跡をいくらでも抉れる。

「払います。払いますから、それだけは……」

彼女は近場のタンスの這いより、一番下の段を開け、茶封筒を美智留に渡してきた。胃の中身で汚れた手で触れたのだから、当然それなりに汚れているのだが、美智留は気にせず笑顔で受け取る。

「はい、確かに」

それから今気づいたように続ける。いつも通りの手順。

「あ、あとそれから、私たちのことを警察等に連絡しても無駄ですよ。何せ証拠が何一つ無いですし、私たち、正確には美香さんに依頼した時点で貴方も共犯者ですから、貴方も逮捕されちゃいます。まあ、逮捕される前に誰かさんの手によってすり潰されて魚の餌になっちゃっているでしょうけど」

あくまで笑顔。客商売は笑顔が命。俺ももちろん笑顔。犯罪者になつたと言つ自覚を持った柊さんは顔を蒼白にさせている。

「は、はい……」

見ているほうが怖くなるほど顔が青白い。そろそろ俺らはお暇すべきだと見当をつけ、美智留に目で知らせる。

「それでは、私たちはこれで」

美智留は笑顔で会釈し俺もそれに倣った。そして玄関へと歩いていく長い黒髪の後をたどる。

扉の閉まる音に耳を傾け、俺らは疲労がこもったため息をつく。

「正直、殺すときよりこっちのほうが疲れる」

俺は喋り、家に向かい歩き始めた。

「だね。精神的な破壊行動はさすがに良心が痛む」

美智留は隣に並んだ。舗装されていない道路はじりじりと砂の音を鳴らしていた。

「まあ、今回は楽なほうだったよ」

「ああ、最悪なときには逆切れしてくるからな」

「そうそう、無駄に強くて。さつさと壊れちゃえばいいのに」

彼女は月を見上げながら言った。俺は反対に地面を見ながら歩く。街頭も少ない真つ暗な道路は、少し油断したら田んぼに足がつかる事も多々ある。

「お金、どれくらい貯まったのかな」

「知らん。学費は親父が払ってくれているから、それほど心配する必要も無いと思う」

「だねえ。お義父さんは愛人さんと仲良くやっているのかな」

「子供を授かったらしいぞ」

「えっ、そうなの」

彼女は地面を見下げていた俺の顔を下から覗き込んできた。その目には純粹な興味が読み取れる。純粹な興味しか読み取れない。憂いも何も無い。

「この前、電話があつてな。女の子だってさ」

「もう産まれてるの？」

「ああ」

「そっか。会いに行くつもり？」

美智留は天体観測を再開した。俺は前を向く。遠くにある街頭に蛾が集っていて、遠くから牛蛙のうるさい鳴き声。田舎だ。

「まさか。実の母を毒殺した俺がか？」

「そりゃ無理だよねえ」

即答された。

「その次に私の父さんも殺してるわけだし」

「だろ？」

すごく軽い口調で俺たちは話していた。俺たちの仲を完璧に裂いた昔の事件だけど、俺たちの中ではヘリウムガス並みにその出来事は軽い。

もう過ぎた事に価値を見出す事は俺たちに許されないから。

俺は一度夜空を仰いで、満月と確認してすぐに前面へと顔を戻した。

そして、そこには少女がいた。電柱のもたれるように立っている。街頭に照らされ影になり顔は見えない。ハーフパンツにスポーツブランドのＴシャツ。茶色がかったショートカットも合わさって活発な印象。そして腰に鞘。

おかしい。

深夜は誰かを待つように、少女がいる時間ではない。さらに普通の少女は帯刀していない。

俺は美智留に目配せする。彼女も気づいているようで軽く頷いてきた。

俺は鍵束を取り出し、鍵をはじき空間を開錠する。臨戦態勢を整えて、俺たちは無言で彼女の横を通る。

「武器商人と魔女、だな？」

それは俺たちの通し名。殺し名と置き換えても良い。パソコンで言うハンドルネームみたいなもの。

「お前たちを殺して欲しいとの依頼が入った。少々時間を頂きたい。よし、無視しよう。面倒臭い。」

俺は小声で美智留に知らせ、美智留は肯定もせず歩みを止めない。どうやら同意してくれたようだ。俺も彼女に並ぶ。

「ちょ、ちよっとおー！初仕事なんだしカッコつけたんだから少しは反応してよ！」

何だか聞こえるけど気にしない事にしよう。

「そう言えば、明日、義姉ちゃんがご飯担当だよな？」

本名を晒すのはバカがやる事なので俺は、いつもは使わない義姉



ちゃんと言つ言葉を使う。

「そうだけど？」

美智留も会話に乗ってきてくれた。

「なに作るかもう決めているのか？」

「まだだけど、何か食べたいものでもあるの」

「和食が食べたい」

「それじゃ、定番の肉じゃがとか」

「あ、いいかも」

「それじゃ、そうするわね」

「つて、ほんとにスルーするなー！」

じゃり、と地面をこする音が聞こえたので俺たちは少し歩く速さを早めた。後ろ髪に少女靴が触れたようだ。いきなり側頭部を狙つて来るとは。

「何気ない感じで避けないで！初めての仕事なんだから少しは華を持たせてよー」

鬱陶しい。殺す、のは美智留がいるから控えるとして、再起不能にするか。

「初仕事か。それは可哀想に」

横で美智留が「アホ……」とため息をついた。俺は振り返り少女の顔を見る。くりくりとした目を光らしている。幼いけど、俺らと同じ十代前半だなと俺は半ば確信した。

「俺らが標的なら遂行は確実に不可能だ」

俺は空間に手をつ込み、ジャマダハルと言うイスラム教徒の短刀を取り出す。これは突く短刀で、コの字の中に一本線を足した形の柄に刃が接合されており、握りこみ両手に持ち使用する。けど、俺は片手にしか握らない。

彼女はかまってくれたのが嬉しいのか、嬉々として目を光らしていた。

「うわっ、本当に君たちもあたしと同じなんだあ」

同じ、殺人請負人、ということか。いや、その反応から見るに

「あなたも特別な力があるの？」

美智留も振り返り俺の疑問を口にした。

「まあ、そんなところ！」少女はあくまで明るい。「じゃ、仕事を始めるから、おとなしく死んでください」

少女は腰を落とし鞘を左手で握り、右手で柄を握る。

俺は何をしようとするのか悟り、美智留を引っ張って下がる。

瞬間、白刃が煌き、前髪を奪われ額に傷が小さく入る。少し遅れれば頭がばっさりだ。

「ちっ」

俺は悪態を付き、美智留を上空に投げ飛ばした。美智留は驚いて小さく悲鳴を上げたが、どういう状況が察したらしく大人しく空に浮かぶ。

「おっ、見抜いた」少女は顔を驚きに染めて、嬉しそうに笑んだ。

「見抜かれたのは久々だよ」

彼女が握るのは日本刀、打刀だ。俺も保有しているがそこまでの業物ではない。今は居合だ。しかも刃を鞘に収めないという事は、彼女は抜刀術が主流ではないわけであり、つまりは幅広く剣術を身に付けているわけである。

「たく、面倒臭い」

俺は悪態を付いて、対処の仕方进行を思考する。その間にも彼女は月光に刀身を煌かせ逆袈裟懸けに切り上げてきて、俺はジャマダハルの刀身でそれを滑らせ軌道をずらす。そして空いたわき腹に蹴りを入れようとして、反対に俺がぶっ飛ぶ。

「ぐっ」

軽くうめいて体勢を立て直し、前を見ず後退。そして俺が刹那前に居た場所に白銀の煌き。

俺はわき腹をさすって、膝蹴りを食らった事を悟る。

「滅茶苦茶だな」

俺は独り言めいて呟く。

「だって我流だし」

彼女は斜めに刀を構えて小さく笑った。

訂正。こいつはただ凶器を振り回すだけのやんちゃ坊主だ。対処の仕方なら多様にある。

「さて、美智留！」俺は叫び上を仰ぐ。「殺すつもりでやるぞ！」

「了解」

返答を耳に入れて、俺はジャマダハルをしまい、さらに後退して間を空ける。

「ビビったの？」

安い挑発じみた少女の言葉に俺はスローイングナイフを投げて返答してやる。同時に俺は投擲したナイフを追いかけるように走り、彼女が刀身でナイフを弾いた瞬間を狙って、刀身が俺の身長の一倍ほどある大剣を取り出し、横殴りに払った。

手ごたえは電柱を砕いた感触で良く分からず、だけど生きているだろうと見当をつけて重すぎて持ち上げる事すら叶わない大剣をしまい、ジャマダハルを次は両手に握り田んぼへ疾走する。

「剣山とか！」

上から聞こえる叫び声。俺は危険を感じ疾走を止めて立ち止まる。グラツと少し地面が揺れた、次の瞬間、目の前の田んぼが高速で地響きと共に鋭く尖る。文字通り剣山だ。青い米の苗も巻き込んで余すことなく針の山。対話ではなく命令したのか。

「ふー」

しかし、少女の声が聞こえる。

「さすがに死ぬよ……ねえ、ミリーちゃん」

少女はなんと針の上に立っていて、それ以上に驚くのが、少女は針の上、いや正確には楕円形の何かの上に立っているのだ。

「あつ、紹介しとくよ。これがあたしの能力、ミリーちゃん」

可愛らしく少女は言うが、そのミリーちゃんとやらの姿はおぞましいの一言だけだった。

軽トラック並の大きさの楕円形のぼつちやりした黒色の球体に、

大量の、目。まるでその身体を埋め尽くすかのように大量の瞳があり、あちこちをせわしなく眺め、そしてそのうちの数十個は俺のほうを見ていた。

前方には端から端まで裂けた血のように赤黒い分厚い唇。昆虫のような太く、滑り止めが付いた六本の足が剣山の上を跨いでいた。

「可愛いでしょう」

少女の美的センスは全力で否定すべきだと思う。俺の常識にありえない風貌だ。

「さらに凄いだよ！」

少女はそう言って、腕を伸ばしてこつちを人差し指で指してきた。「そりゃー、突撃だあ、ミリーちゃん！」

少女の言葉に反応したようにググツ、と足をかがめ、そして跳躍。俺のほうへと真直ぐに飛んでくる。そして俺の目の前に着地。

大量の瞳が俺を射抜き、そこには殺意も敵意も無く、ただの無機質な人形のような瞳。

怖い。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

何も見えないような瞳。虚ろでもないのに、異常の瞳。俺の眼球の裏側まで見抜かれているようなのに。ただ、無機質。

その口を広げて、俺を食べようと近づいてきて、口内を俺は見てしまった。

大量の口。口内にさらに小さな口が広がり、そしてその口からもさらに口。牙のような歯はかすかに振動している。舌には手が生えており、俺を招くように揺らいでいる。

異形の化け物は、ただの恐怖を俺に植え付けた。精神が壊れそうだ。心が砕けそうだ。

膝が震え、冷や汗が流れる。その間にもミリーは俺に一步一步いたぶる様にゆっくり近づいてくる。

もついやだ。殺してくれ。殺してくれ。殺せ。殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ。

「命令！大気は凝固の任につき、槍と化して彼のものを突き破れ！」  
ヒュンッ、と鋭い音が聞こえたと思ったら目の前の化け物の口内の大きな穴が出来た。そこから黒い体液が漏れる。少女は呆然とそれを見ていた。

呆然として空を仰ぐと憤然とした美智留の姿があった。

「臆病すぎ！」

そしてふわりと落下してきて、俺の上に、頭頂部を踵で踏みについた。必然的に俺は前のめりに地面にめり込み、美智留はさらに後頭部を踏みにじってくる。その分地面へと顔がめり込む。

「一度死ね。内蔵ほじくり返して遊んでいるお前が何をいまさら怖いものがあるのか」

グリグリとひねっていた足がガンガンと頭頂部を蹴ってきた。

「ほら、敵の目前で寝ている暇があるのか？」

地面が盛り上がり、無理やり立たされる。土で汚れた顔を指で美智留の指でぐいぐい拭い取られた。

「よし、ファイト！」

そしてぼんぽんと背中を叩かれた。

いや、ファイトってあんた……

「ああ、しんど……」

俺は爺臭い事をばやいて、ジャマダハルを強く握り締めた。

「ちよ、ちよっと待ってー！ミリーちゃんが怪我したから今日はここまで！」

我に返ったらしい少女がそう叫んできた。

「ほら、あたしが殺しに来たんだし、あたしがやめればそこでおしまいじゃない？これで万事オッケー、と言うことでサラバ！」

俺らが何かを言う前に彼女の姿はすぐに消えた。もしかしたらあのミリーちゃんとやらの能力なのかもしれない。

「嵐というより竜巻だな」

「かも」

俺たちはため息をつき、前髪が変に切れたことを思い出し俺は少

し憂鬱になった。

「ミリーちゃん、怖かった」

俺は憂鬱のまま独白する。

「俺はグロイのダメだ」

「いまさら何を言うか」美智留は歩き始める。「早く帰って風呂入って寝よ」

「ああ」

俺は呟いて彼女に従った。杞憂の種が一つ増えたが、いまさら一つぐらい増えたところで何も変わらない。

だけど、少女が王道マンガのように翌日に転校してこない事だけは祈る。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7331a/>

---

武器商人和魔女

2010年10月10日07時35分発行